守られて幻想郷

果汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
守られて幻想郷

【Ｎコード】
Ｎ３８８０Ｚ

【作者名】
果汁

【あらすじ】
幻想郷――――忘れ去られた妖怪や人間が住まう楽園の地
そんな場所に青年が幻想入りをした。
彼は自分の持つ能力のせいで幻想郷の強者たちから捕食的・性的な意味で狙われている。
果たして彼は貞操を守り抜くことが出来るのか？

一話目（前書き）

初投稿です

目指せ完結！！

一話目

幻想郷――――忘れ去られた妖怪や人間が住まう楽園の地。妖怪は人間を喰らい、人間は妖怪を退治する。そんなお伽話にあるような話がここ幻想郷では常識となっている。

そして、幻想郷ではいくつもの異変が起き、博麗の巫女が持ち前の感と理不尽な強さでいくつもの異変を弾幕ごっこで解決していた。

しかし、当の本人はというと非常に面倒くさがりな性格をしており、異変が起きていない時は、博麗神社でお茶を飲んでいるか境内の掃除しかしていない。参拝客が来ても鬼のような眼差しで賽銭を入れるように威圧感を与え、参拝客に恐怖という名のご利益を与えている。

そんな素敵な巫女さんの名前は「博麗霊夢」
脇がチャーミングな楽園の巫女である。

しかし、最近になって博麗神社に新たな居候が出来た。素敵な巫女さんと違い弾幕ごっこも出来ず、空も飛べない、特に容姿も整っている訳でもない普通の男である。

「霊夢さんや」

「なによ」

「飯はまだかのう」

「おととい食べたじゃない」

「いや、食事は一日三食だろ！！！
なんで三日に一食が常識になってんだよ」

「うるさい！！！だったらお賽銭入れなさいよ！！！」

霊夢の右ストレートが男の顔面に炸裂。
青年は涙目になりながらも霊夢を睨みつけるが、本人は知らん顔である。

「ぐっ・・・居候先間違えたかな・・・」

「別にここを出て行ってもいいのよ？死にたいのならね・・・」

「自殺願望はないからな。しばらくここで居候させてもらうわ。
ただここで餓死するかもしれんが」

一言多いわよと、霊夢はジト目で男を睨むが、男は先ほどのお返しとばかりにスルーした。

「あぁー無駄な体力を使っちまったよ。することもないし昼寝でもするかねぇ」

「その前にあんたには境内の掃除があるわよ。働かない居候に価値はないわ」

へいへいと非常に嫌そうな顔をしながらも、青年は霊夢に制裁が加えられるのを恐れてそそくさと掃除を開始した。

「まったく・・・なんであいつはあんなにグータラなのかしら」

彼女を知るものがその場にいればお前が言うなと総ツッコミを言われたであろう。

それにしてもと、境内でほうきを手に取り掃除をしている青年を見て彼女は思う。

特に何かに秀でているわけでもない、人畜無害な青年がなぜ幻想郷の強者と言われる者たちに狙われているのか。

「幻想郷の『イケニエ』か・・・あいつも運が悪いわね」

そんな青年の名前は「みつる」　数字で書くと３２６。

幻想郷の強者たちに捕食的、性的な意味で狙われている青年である。

彼の物語はここから始まる

二話目

「うぅ、今日は一段と寒いな」

博霊神社に居候している青年、みつるは箒を片手に境内を掃除していた。幻想郷は本格的に冬を迎えようとしており、冷たい風が容赦なく襲いかかる。

一通り掃除を終えたみつるはこんなもんかな、と一息つくと箒を掃いていた手を休めた。ふと空を見上げると、黒い影がこちらに接近していた。

黒い影を見つけた瞬間、みつるは持っていた箒を放り投げ、一目散に境内の中に逃げ込もうとしたが、黒い影はスピードを増し、みつるが境内の中に入る前に体当たりを放った。

みつるの断末魔が神社に響き渡り、炬燵でお茶をすすっていた霊夢はまたか、とため息をついた。

「ちょっと魔理沙、掃除したばっかりなのに荒らさないでよ」

「なに、私を見て逃げ出した奴がいたからお仕置きしただけだぜ」

黒い影の正体、それは、自称、普通の魔法使い――――「霧雨魔理沙」金色の長い髪が特徴で、黒系の服に白のエプロンという個性的な服を着ている。

脇が出ている巫女さんも個性的だが。

魔理沙は気絶しているみつるを引きずりながらお構いなしに神社の

中へ入り込んだ。

「はぁ、それであんたは何しに来たのよ」

「いつも通り暇つぶしと、みつるいじりだぜ」

魔理沙は笑いながら気絶しているみつるの顔をぺちぺちと叩きながら答えた。どうやら彼のこの扱いは日常茶飯事らしい。

「ふぅ、それにしても今日は寒いな。なぁ霊夢、こいつ借りていっていいか？」

「会話が全く繋がってないわよ。それにあんたに貸したら帰ってこないでしょ」

「そんなことはないぜ。私が死んだら帰すさ」

「それは帰ってこないとおなじよ」

ちらりと横でピクピク痙攣している男を確認して霊夢は呆れ顔で答えた。この男は気絶しなかった日がないのではないか。そんなことを考えながら霊夢はお茶を口に含み一服した。

だが、彼を気絶させた回数は圧倒的に霊夢が多いのだが、本人は気づいていない。自覚がないあたり、余計にたちが悪い。

するとようやく意識を取り戻したのか、みつるは背中に激しい痛みを感じながらも、気絶した元凶を睨みつけた。

「おいこらぁ！！いつも人をゴミのように轢きやがって！！慰謝料

を要求する！」

「私を見つけたらすぐ逃げ出すのが悪い。お前に避けられて私の乙女心も深く傷ついてる。むしろお前が慰謝料を払うべきだぜ」

「乙女心（笑）いや魔理沙さん冗談ですからその物騒なミニ八卦炉をお戻しください」

「ちょっとマスパぶっ放したくなっただけだから気にしなくていいぜ」

「いやいや、そんな遊び行こうぜ的なノリで撃たれたら命がいくつあっても足りねぇよ」

「ちょっと魔理沙、弾幕ごっこなら外でやってくれる？神社に傷つけたら許さないわよ」

俺の心配より神社の心配かよ、とみつるは心の中で号泣したが、それもいつものことかとすぐに立ち直った。単純な男である。

「そんなことより魔法の森で珍しいキノコが採れたんだ。みつる、ちょっと味見しれくれないか？」

「おい、俺は毒味係じゃないぞ・・・って何だよこのキノコは！！」

「ん？ただのキノコだぜ？」

「ただのキノコに目玉は付いてねぇよ！！色も赤と白で気味悪いし」

某赤と緑の配管工のおっさんがパワーアップしそうなキノコを取り

出し、みつるに食べさせようとする恋色の魔法使い。恋色とは何色だと気にしたら負けである。

「ちぇっ、ならこのキノコはチルノにでも食べさせるぜ」

渋々キノコを直す魔理沙を見て、みつるはホッとしながらも悲惨な目に合うことが確定した氷精に合唱した。

「てか、たまには外に出たらどうだ？ずっと貧乏神社にいても退屈だろ？」

「貧乏には同意するが、俺が外に出たらバッドエンド一直線だろ」

「まぁお前は弱っちぃからな。でも安心していいぜ。みつるは私が守ってやるぜ」

非常に頼もしい言葉を受けて、日ごろから扱いは酷いがいざとなったら頼もしい友人がいてよかったと内心感激していた。

「あんた達、貧乏で悪かったわねぇ。ところで私も最近運動不足だから弾幕ごっこに付き合ってくれないかしら？」

目は全く笑っていないが、素晴らしい笑顔で二人に詰め寄る霊夢さん。いや、霊夢様。

「ちょっ、魔理沙！！ラスボスが降臨したぞ！俺を守ってくれ！！」

「悪いなみつる。お前の用心棒は今契約が終了したところだ」

さっきの守ってやる発言からわずか１０秒足らずで前言撤回。さす

がは魔理沙と褒めてやりたい。

鬼巫女と化した霊夢の渾身のボディーブローが、魔理沙が盾にしていたみつるの腹筋を抉り込む。腹筋２０回が限界のみつるには耐えられるはずがなかった。

「ぐほっ・・・れいむさんや・・・それは弾幕ごっこやない・・・ただのパンチや・・・」

しっかりとツッコミを入れて役目を果たしたみつるは呆気なく気絶した。

「別に私の気が治まればどっちでもいいわよ」

「相変わらずこいつの扱いは酷いな」

「あんたに言われたくないわよ。ところで魔理沙、あんたに聞きたかったことがあるんだけど？」

「ん？なんだ？」

「あんたもこいつを狙っているのかどうかよ」

「さぁな。ただ興味はあるぜ。なんたってこいつは『器』だからな」

魔理沙の言葉に、霊夢は本日二度目の気絶をしている男の顔を見ながら物思いにふけた。霊夢がこの時何を思ったのか、彼女しかその答えは知らない。

三話目

太陽が沈み、幻想郷は夜を迎えようとしていた。昼間よりも妖怪たちは活発に活動し、何の力のない人間が外に出ようものなら、すぐに胃袋に収まるであろう。

博霊神社にいる二人の美少女と一人の青年も、明日に備え就寝の準備をしていた。もちろん夕食はなしである。

「で、あんたは何で当然のように泊まろうとしてんのよ」

「外は寒いし今から帰ってもすることはないから今日は泊まってくぜ」

家主の許可をもらう前に布団を準備していた魔理沙。布団は二つしか無いため、必然的にみつるは布団なしで寝る羽目になった。哀れである。

「そういえば霊夢、今日みつるにいつものやつをするんだろ？」

「面倒くさいけどね。まぁ私としては得だから別にいいけど」

「なぁなぁ、今日は私がやっていいか？いつも霊夢ばっかりずるいぜ」

「ダメよ。あんたと私じゃやり方が違うでしょ」

「なんだよそれ。私がしたって問題ないだろ。独り占めしようったってそうはいかないぜ」

魔理沙は立ち上がるとどこからか取り出した魔法書を開き、何かの儀式を行うかのような魔方陣を出現させた。ちなみにこの魔法書は知り合いに借りた（強奪）したものだ。

「ふぅー、いい湯だった・・・って魔理沙！！何してんだよ！！」

風呂から上がりパンツ一丁で登場した青年、みつるは目の前の光景に我が目を疑った。風呂から上がってみれば怪しげな魔方陣の中央で、魔理沙が魔法書を読みながら何かの準備をしていた。

魔理沙はパンツ男を見つけるとニヤァと妖しげな笑みを浮かべ手招きをした。

「待ってたぜみつる。今日は私がシテやるからな」

「待ちなさい！！あんたにさせるなんて言ってないわよ！！それにあいつだって私に任せた方がいいって言ってるじゃない」

「いや、俺は何も言ってないし思ってもいない」

パンツ男の発言を無視し、霊夢と魔理沙は更に口論がヒートアップ。自分の事なのに存在が無かった事にされている本人は密かに目を閉じ、現実逃避を開始した。

しかし、ふと周りに違和感を感じおもむろに目を開くと先ほどまで神社にいたはずだったのに、いつのまにか洋風の部屋に自分がいることに気付いた。

「・・・は？」

まさか現実逃避が実現してしまった事実にみつるは驚きを隠せないでいた。さっきまで確かに巫女と魔法使いが言い争っていたはずなのに。もしや、自分の中に眠る真の力（笑）が目覚めたのではないのだろうか。

「そんな事あるわけないでしょ。私が連れて来たのよ」

後ろから聞き覚えのある声が耳に入り、すぐさま後ろを振り向くとそこには吸血鬼の館、『紅魔館』のメイド長、『十六夜咲夜』が目の前にいた。

「いつからさとりになったんですか咲夜さん。というかなぜ俺は拉致されたんですか？」

「声に出てたわよ。聞いてる方が恥ずかしいくらいにね。それとあなたを連れて来たのはお嬢様がお呼びだったからよ」

まさか誰かに聞かれているとは知らず、彼の黒歴史ノートに新たな一ページが追加された。彼の黒歴史ノートは2冊目に突入している。

「さいですか。ところで咲夜さんのボスが俺を呼んでるって言いましたよね？こんな格好じゃ無礼ですので帰っていいですか？」

「安心なさいな。どんな格好でもあなたの運命は決まっているんだから」

ふふっ、と魅惑の笑みを浮かべパンツ男に詰め寄るメイドさん。中々にシュールな光景である。

「さぁ、お嬢様がお待ちよ。付いて来て頂戴」

「付いて来てといいながら首を掴むのやめてもらえませんか？」

彼の発言を華麗にスルーし、二人は部屋を出て行った。部屋から出ると、まるで迷宮のような長い廊下が現れた。周りは赤一色で統一されており、何とも目に悪い光景に彼は自分の首を掴んでいるメイドに目線を合わせた。

完全で瀟洒な従者という二つ名を持つ目の前の女性、十六夜咲夜。霊夢や魔理沙と同じ人間でありながら、主である吸血鬼に仕えている。整った顔立ちに珍しい銀髪、何よりリアルメイドさんという、現代ではお目にかかれないであろう。

美しい横顔に思わず見惚れそうになるが、彼女を怒らせるとどこからともなくナイフが飛んでくるため、どこぞの巫女や魔法使い同様、発言には細心の注意が必要である。

「着いたわよ。この中でお嬢様が待ってるわ」

長い廊下を歩き続けてようやくお目当ての部屋の前に到着し、咲夜は青年の首から手を放すと、部屋の中に入るように催促した。彼はドアノブに手を掛けるが、中に入る前から強烈な威圧感が彼を襲い、さっき風呂で流した汗が再び彼の全身を駆け巡る。彼が幻想郷に来て培って来た危険察知能力が頭の中で鳴り響いていた。察知するだけで回避したことは一度もないのだが。

「咲夜さん。俺はあなたに伝えたいことがあるんだ」

いつにも増して真剣な表情で語る彼の顔を見て咲夜は思わず頬を赤

く染めた。自分は主に仕える従者。それはもちろん誇りに思っているし、死ぬまで仕えるつもりでいる。しかし彼女も女である。男に興味がないわけでもないし、ロマンチックな思考だって持ち合わせている。初めて異性から言われるかもしれない言葉を期待した。

「ちょっと汗がパンツに染みて気持ち悪いから帰っていい？」

「・・・」

彼のお気に入りのパンツが一枚、犠牲になったのは言うまでもない。

三話目（後書き）

パンツは犠牲になったのだ

四話目（前書き）

新年あけましておめでとうございます。

四話目

お気に入りのパンツ（定価５２５円）がメイド長、咲夜の手により犠牲になり、頭に巻いていたタオルを股間に装着し、大きな扉の前に佇んでいる青年、みつる。
その隣には元凶である咲夜が何事もなかったかのように微笑んでいた。

「時間止めてパンツ切り裂くとか能力の無駄遣いすぎるだろ。つかなぜパンツ切り裂いたし」

「別に減るものじゃないし無駄遣いではないわ。あなたの下着は私を弄んだ代償と思いなさい」

弄ぶ？と不思議そうな顔をして咲夜の顔を見るみつる。表情は柔らかく見えるが、彼女から発せられるオーラを感じ取り咄嗟に目を逸らした。これ以上余計な事を言えば殺られる。彼のおしゃべりな口は直感のままに閉じられた。

「さて、無駄な時間を過ごしたわね。早く中に入りなさい。お嬢様がお待ちよ」

「そんなことよりカメムシの話でもしようぜ。いやーカブトムシって何であんなに臭いんかなぁ・・・って開けちゃらめぇぇぇ」

彼の無意味な時間稼ぎは咲夜には通用せず、ゆっくりと扉が開かれていく。扉の先には何十人と座れるであろうテーブルと、その奥で優雅に座っている一人の幼女がいた。

「お嬢様、遅くなりまして申し訳ございません。ご命令通り連れて参りました」

「ご苦労、咲夜。下がっていいわよ。ふふっ、久しいわね。みつる。歓迎するわ」

名前を言われた青年はこの世の終わりが来たかのような絶望した顔で名前を呼んだ幼女を見つめる。

幼女の名前は「レミリア・スカーレット」永遠に紅い幼き月の二つ名を持つ紅魔館の主。その正体は５００年生きた吸血鬼であり、メイド長、咲夜の主でもある。彼女の持っている雰囲気、気品はまさにカリスマと呼ばれるに相応しい。しかし幼女である。

「あら、大胆な格好してるじゃない。そんなに私にシテほしかったのかしら」

「お、お久しぶりです。レ、レミリアさん。この格好はお風呂上がりですので。お、お気になさらず。そ、そんなことよりこんな底辺の存在の私に何か御用でしょうか？」

「別に大した用はないわ。強いて言うなら・・・暇つぶし？」

「どうせそんなことだろうと思ったよ！！」

彼はあらかじめ自分を拉致した理由を予想していたらしい。伊達に何度も拉致を経験しているわけではない。彼の拉致の経験値はカンスト状態だ。全く無意味なことだが。

「ふふっ、まぁ折角来たんだから食事でもご馳走するわよ。神社じ

ゃまともな食事をしていないでしょ」

「私のことは豚とお呼び下さい。お嬢様」

目にも止まらぬ速さでテーブルの席に着く豚。その速さは吸血鬼の目でさえ追えなかった。

久しぶりの豪華な食事を堪能し食後のコーヒーを飲んでいると、ふとレミリアが席を立った。

「さて、そろそろ私も食事をしようかしら」

レミリア言葉を言い放った瞬間、青年は扉まで走りその場から脱出を図ろうとした。しかし、扉に手をかざそうとした瞬間、どこからともなくナイフが彼の顔を掠めた。後ろを振り返るとそこには咲夜がナイフをこちらに向けていた。

「あら、どこに行くつもり？今からお嬢様がお食事されるのよ」
「そ、そうですか。だったら俺は邪魔だし帰ろうかな。うん、そうだ。そうしよう」
「豚は太らせて食べるのが基本よね」
咲夜の言葉を聞いて青年はハッとした。自分に食事を食べさせたのは布石。全身に栄養を巡らせ、熟成した所で今度は自分が食材になる。これはまさに計画的犯行。
（くそっ、こんなことならお替りは3杯までにしとくべきだった）
何杯にした所で結果は変わりようがないのだが。
「ふふっ、本当は私にシテもらいたくてしょうがないんでしょう？だからそんな格好でここまで来てるんだし」
「ちげぇよ！！そこのメイドに風呂上がりに拉致されたんだよ。それに今日は霊夢にお願いする日だったからこの姿で待機してたん・・・あっ」
「へぇ、そうなの。まだ霊夢にシテもらってないのね・・・いい事を聞いたわ」
青年の話を聞いた途端、レミリアはまるで悪魔のような顔でみつるを見つめる。いや、実際悪魔だが。
「じゃあ今のあなたの血はまさに極上品ってわけね。栄養も力も満

タン・・・さぞかしおいしいんでしょうね。さぁこっちに来なさい。あなたが好きな、吸血をしてあげるわ。服も脱いでるし準備は万全ね」

「吸血されるのが好きなやつなんているわけないだろ！！」

反論しながら一歩一歩後ずさりをする青年。だが背中に壁が当たり、とうとう逃げ場がなくなった。もう駄目だと、青年は諦め目を閉じる。

その時、爆弾が爆発したかのような大きな轟音が響き渡った。もしや、霊夢が助けに来てくれたのかもしれない。そんな期待を胸に、みつるは目を開いた。

「あはっ。みーつーるー。みーつけた」

そこには青年の希望を打ち砕き、更なる絶望を与える存在、「フランドール・スカーレット」が壊れた扉の前に佇んでいた。

四話目（後書き）

クリスマス、正月という2大イベントを仕事で潰されるとは・・・

（；ω；）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3880z/

守られて幻想郷

2012年1月6日03時54分発行